DOI: 10.18999/nujlp.286.1

石井三記先生は、本年３月をもって、名古屋大学教授の職を退かれました。

ここに同先生の肖像を掲げて、多年にわたる本研究科へのご貢献に対し、厚く感謝の意を表します。

名古屋大学大学院法学研究科

石井　三記　先生

惜別の辞

石井三記先生は、2020 年 3 月をもって名古屋大学大学院法学研究科を定年退職されました。長年のご功績に心より感謝を申し上げます。

先生は、1999 年 4 月に名古屋大学大学院法学研究科に教授として着任され、その後、21 年間に亘り本学で研究教育を担われました。先生は、大学が大きな転換を迫られた 2016 年から 2 年間、法学研究科長をお務めになり、特定基金の創設や寄付講座の立ち上げをはじめとする諸事業に心血を砕いて取り組まれ、法学部および法学研究科の円滑な運営と発展のために貴重な貢献をなさいました。また、国際交流にも熱心に取り組まれ、パリ第 2 大学との学術交流協定を締結されたほか、リール大学やパリ第 13 大学、ランス大学との学術研究大会を開催されました。

教育面では、西洋法制史等の講義・演習を担当され、学生の教育研究指導にご尽力されました。石井先生は、専攻を問わず、留学生を含む多くの学生に西洋法制史ゼミの門戸を開かれ、学生の関心と考え調べる力を信じて、穏やかに、柔軟に、ともに考えながら導いてくださる石井先生の下に、多くの熱意ある学生が集まりました。そして、そのなかから、博士号取得者やフランス留学者を輩出されました。また、ホームカミングデイ等の機会にご研究を通じて収集された貴重書等の展覧会を開催され、学内外の多くの者を法制史の世界に誘ってくださいました。

このような教育活動は、無論、優れたご研究に裏打ちされたものでした。先生は、フランス法制史を専攻され、啓蒙期の刑法改革思想の研究を起点に、アンシャン・レジームの国王儀礼、革命期の国王裁判の投票行動、1789 年人権宣言、ナポレオン期の法典編纂などのご研究を重ねられ、学問に多大な貢献をしてこられました。ご単著『18 世紀フランスの法と正義』（名古屋大学出版会、1999 年）では、法社会史的視点による分析という独自のアプローチによって、フランス刑法典の思想的基盤が成立する過程を具体的に明らかにされたところ、同書は、今日でも、法学者のみならず仏文学者や思想史研究者にも参照され、幅広い定評を得るものとなっています。

石井先生のご研究は、フランス法制史研究のみならず、広くフランス法研究に大きな功績を残すものでした。とりわけ、2004 年に 200 周年を迎え

たフランス民法典については、日仏の学知を結集し、同法典の歴史的今日的意義を考察するご編著『コードシヴィルの 200 年』（創文社、2007 年）を上梓され、フランス法制史研究およびフランス法研究の節目を刻まれたのでした。近年では、図像学的言語分析を用いたご研究に従事され、例えば、「1789 年フランス人権宣言のテルミノロジーとイコノロジー」（法政論集 255 号、2014 年）では、公民教育に使われた「すごろく遊び」やポスター等を分析された上で人権宣言の新たな翻訳を提唱され、従来の人権宣言理解をより深めてくださいました。これらのご研究を通じ、石井先生は高等師範学校（École Normale Supérieure）等でのご講義や、フランスの専門家からのインタビューをお引き受けになっており、ご研究対象国である同地でも、先生のご研究とお人柄への信頼が大きいことを物語っています。

社会活動としては、石井先生は法制史学会の理事を務められ、斯界の発展に貢献されたほか、2009 年から 2016 年には、名古屋大学出版会の理事長をお務めになり、学術出版を支えてこられました。

多方面で本学に多大なご貢献をなさった石井先生をお送りすることは寔に名残惜しいことですが、いつまでもお元気で、これからも後生にご教授をくださいますよう、切にお願い申し上げます。石井先生の本学でのご功績に感謝を重ね、惜別の辞といたします。

石井三記先生　経歴と業績

【略歴】

1955 年 3 月　佐賀県鳥栖市に生まれる

1973 年 3 月　久留米大学附設高等学校 卒業

1973 年 4 月～ 1980 年 3 月　京都大学法学部 卒業

1980 年 4 月～ 1982 年 3 月　京都大学大学院法学研究科修士課程 修了

1982 年 4 月～ 1985 年 3 月　京都大学大学院法学研究科博士課程 単位取得満期退学

1985 年 4 月～ 1991 年 3 月　和歌山県立医科大学進学課程 専任講師

1991 年 4 月～ 1993 年 3 月　和歌山県立医科大学進学課程 助教授

1993 年 4 月～ 1998 年 3 月　東海大学法学部 助教授

1998 年 4 月～ 1999 年 3 月　東海大学法学部 教授

1999 年 4 月～ 2020 年 3 月　名古屋大学大学院法学研究科 教授

2005 年 4 月～ 2007 年 3 月　名古屋大学大学院法学研究科 総合法政専攻長

2016 年 4 月～ 2018 年 3 月　名古屋大学大学院法学研究科 研究科長

（この間、和歌山大学教育学部、名古屋大学法学研究科、京都大学人文科学研究所、駒沢大学法学部、成城大学法学部、東海大学法学部、南山大学法学部、名古屋学院大学法学部において非常勤講師、パリ第 2 大学で在外研究、ストラスブール大学およびパリ高等師範学校で招聘教授、ケベック大学とパリ第 1 大学との共同指導学位論文審査委員を務めた）

2014 年 6 月～現在　法制史学会 理事

2009 年 4 月～ 2016 年 3 月　名古屋大学出版会 代表理事

【主要業績】

(1) 著訳書

① ヨーロッパ法文化の流れ、ヘルムート・コーイング著、上山安敏監訳、「8 法史研究における社会学的方法の意義」、石井三記（共訳）、ミネルヴァ書房、1984 年

② 資料 フランス革命、河野健二編、「1791 年憲法」「布告 祖国は危機にあり」「ギルドの廃止」「王権停止の諸法令」「公安委員会の設置の法令」「総動員法」「最高価格法」「公安委員会の独裁樹立」「ヴァンデミエール事件にかんする国民公会の布告」「総裁政府の宣言」「フリュクチドールのクーデタ後の総裁政府の布告」「チザルピーナ共和国との条約」の各項目、石井三記（翻訳および解題）、岩波書店、1989 年

③ 新法学事典、末川博創始、杉村敏正･天野和夫編集代表、「キュジャス」「グラッソン」「ゴドフロア」「ドノー」「フュステル・ド・クーランジュ」「ボーマノアール」「ロアゼル」の各項目、石井三記、日本評論社、1991 年

④ フランス革命事典 1・2、フランソワ・フュレほか編、「憲法」「公安委員会」「最高価格」「アメリカ革命」の各項目、石井三記（翻訳）、みすず書房、1995 年

⑤ 18 世紀フランスの法と正義、石井三記、名古屋大学出版会、1999 年

⑥ 近代法の再定位、石井三記・寺田浩明・西川洋一・水林彪編著、創文社、2001 年

⑦（訳書）ルイ 14 世―作られる太陽王、ピーター・バーク著、石井三記訳、名古屋大学出版会、2004 年

⑧ 歴史学事典 第 12 巻 王と国家、黒田日出男責任編集、「パリ」「リシュリュー」「ルイ 14 世」「ルイ 16 世」の各項目、石井三記、弘文堂、2005 年

⑨ コード･シヴィルの 200 年―法制史と民法からのまなざし―、石井三記編著、創文社、2007 年

⑩（報告書）政治裁判の法制史的研究―フランス革命期の国王裁判を中心にして―、石井三記、2008 年

(2) 論文等

① カラス事件の法的側面 ― 一八世紀フランスの誤審事件、石井三記、法学論叢 114 巻 6 号（頁：31-54）、同 115 巻 1 号（頁：41-62）、1984 年

② 啓蒙期の刑法改革思潮 ― ヴォルテールの刑法改革思想を中心にして、石井三記、法学論叢 117 巻 4 号（頁：35-61）1985 年、同 119 巻 1 号（頁：26-46）、1986 年

③ ラ・バール事件の法的考察―18 世紀フランスの不敬神事件、石井三記、和歌山県立

医科大学進学課程紀要 15 号（頁：31-55）、1986 年

④シルヴァン事件の法的諸相―18 世紀フランスの誤審事件、石井三記、和歌山県立医科大学進学課程紀要 16 号（頁：35-61）、1987 年

⑤十八世紀フランスの国王・法・法院、石井三記、上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』ミネルヴァ書房所収（頁：165 -190）、1987 年

⑥18 世紀フランスの刑法学者と刑法改革思潮―ミュイヤール・ド・ヴーグランの肖像、石井三記、和歌山県立医科大学進学課程紀要 17 号（頁：35-59）、1988 年

⑦十八世紀フランスの「国制」像―モープー期を中心として、石井三記、樋口謹一編『空間の世紀』筑摩書房所収（頁：47 -75）、1988 年

⑧大法官モープーの『国王への報告』について―フランス 18 世紀後半の司法改革、石井三記、和歌山県立医科大学進学課程紀要 18 号（頁：61-80）、1989 年

⑨フランス君主制の儀礼と象徴、石井三記、社会思想史研究 15 号（頁：17-30）、1991 年

⑩王権のイコノ・フォークロア―main de justice、石井三記、比較法史学会会報 2 号（頁：7-14）、1992 年

⑪フランス革命期の法学教育・司法制度・法曹、石井三記、京都大学人文学報 70 号（頁：125 -163）、1992 年

⑫ルーダンの事件とその時代―十七世紀フランスの悪魔憑き事件と国制の問題、石井三記、東海法学 11 号（頁：171 -216）、1993 年

⑬神・王・justice ―権力をめぐるシンボリズム、石井三記、法社会学 46 号（頁：100 -106）、1994 年

⑭フランス憲法院のなかのミシェル・フーコー、石井三記、書斎の窓 439 号（頁：39 -43）、1994 年

⑮フランス啓蒙期の「陪審制」論、石井三記、経済論叢 156 巻 4 号（頁：28-55）、1995 年

⑯ロレーヌ地方の魔女裁判とサバト、上山安敏・牟田和男編『魔女狩りと悪魔学』人文書院所収（頁：151 -184）、1997 年

⑰フランス革命と刑法空間の変容、阪上孝編『統治技法の近代』同文館所収（頁：85 -116）、1997 年

⑱フランス革命期の国王裁判における法的側面、石井三記、名古屋大学法政論集 186 号（頁：195-240）、2001 年

⑲ヨーロッパの王権儀礼―フランス宮廷、石井三記、網野善彦ほか編『天皇と王権を考える 第 5 巻 王権と儀礼』所収（頁：121-151）、岩波書店、2002 年

⑳（翻訳）法典化と司法解釈―フランスの経験から法の理論へ、ジャン＝ルイ・アルペ

ラン著、石井三記・小柳春一郎共訳、名古屋大学法政論集 209 号（頁：213 -239）、2005 年

㉑ 第 9 章 フランス法制史からのコメント、石井三記、三成美保編『ジェンダーの比較法史学』所収（頁：187-201）、大阪大学出版会、2006 年

㉒（翻訳）カメルーンの裁判制度とフランスの果たした役割、ジャン＝ポール・エユク＝ニエベル著、石井三記・小林智共訳、名古屋大学法政論集 212 号（頁：465 -500）、2006 年

㉓ ベッカリーア『犯罪と刑罰』第五版（1・2・3 完）、石井三記・福田真希共訳、名古屋大学法政論集 228・229・231 号（頁：367-393、221-248、231-269）、2008・2009 年

㉔ 歴史の中の法典化、石井三記、「法整備支援戦略の研究」全体会議報告書（頁：17 -26）、2009 年

㉕（翻訳）「われわれがこうした連中を人間であると仮定することは不可能である」:『法の精神』第一五編における奴隷制の理論、セリーヌ・スペクトール著、石井三記訳、名古屋大学法政論集 241 号（頁：243 -261）、2011 年

㉖ 第二章 フランスにおける治安判事の誕生と勧解調停制度、川口由彦編『調停の近代』所収（頁：59 -91）、勁草書房、2011 年

㉗（翻訳）モンテスキューの作品における法と正義 : 法制史と法理論の交差する読解、ジャン＝ルイ・アルペラン著、石井三記訳、名古屋大学法政論集 247 号（頁：160 -188）、2012 年

㉘（翻訳）シンポジウム「アジアとヨーロッパにおける人権 : 確立・制度・保護」、P. ブロック、石井三記、P. ボナン、E. ネフラミ、L. ユズニエ、S. トゥータン、E. ドグロ、J. ポラキウィッチ著、石井三記・福田真希共訳、名古屋大学法政論集 248 号（頁：252 - 348）、2013 年

㉙（翻訳）16 世紀から 18 世紀フランスにおける暴力とその衰退、ミシェル・ナシエ著、石井三記・嶋中博章・福田真希共訳、名古屋大学法政論集 253 号（頁：521 - 544）、2014 年

㉚ 一七八九年フランス人権宣言のテルミノロジーとイコノロジー、石井三記、名古屋大学法政論集 255 号（頁：37-80）、2014 年

㉛（翻訳）モンテスキューの有名な喩え「法律の口としての裁判官」について、セルジュ・ドシ著、石井三記訳、名古屋大学法政論集 256 号（頁：325-343）、2014 年

㉜ フランスにおけるマグナ・カルタ観、石井三記、名古屋大学法政論集 264 号（頁：337-351）、2015 年

㉝（翻訳）コンセイユ・デタと基本権の保護、ジャン＝マルク・ソヴェ著、晴山一穂、石井三記、福田真希、河嶋春菜共訳、名古屋大学法政論集 271 号（頁：175 -208）、2017 年

㉞（翻訳）19 世紀フランスにおける人権から公的自由への変遷、ジュリアン･ブドン著、石井三記・河嶋春菜共訳、名古屋大学法政論集 276 号（頁：431 -457）、2018 年

㉟（翻訳）人権と弁護士職 : 仏独日三か国の例に見る両者の歴史的連関、ジャン＝ルイ･アルペラン著、石井三記･河嶋春菜･松本薫子共訳、名古屋大学法政論集 278 号（頁：381 -406）、2018 年

㊱（翻訳）フランス革命期の諸人権宣言、ジュリアン・ブドン著、石井三記訳、名古屋大学法政論集 281 号（頁：333 -355）、2019 年

㊲ Analyse iconologique et terminologique de la Déclaration des droits de l'homme et du citoyen de 1789、石井三記、名古屋大学法政論集 282 号（頁：57 -70）、2019 年

(3)　書評

①（書評）宮崎洋「十八世紀前半期のトゥルーズ高等法院官僚（上）（下）」、法制史研究 39 号、1990 年

②（書評）Michael P. Fitzsimmons, *The Parisian Order of Barristers and the French Revolution*、日本十八世紀学会年報 5 号、1990 年

③（書評）樋口陽一『自由と国家』岩波書店、比較法史研究 1 号、1992 年

④（書評）Xavier Martin, Liberté,égalité,fraternité:Inventaire sommaire de l'idéal révolutionnaire français; Id.,Mythologie du Code Napoléon; Id.,Madame de Staël,Napoléon et les idéologues、比較法史学会会報 4 号、1995 年

⑤（書評）Julian Swann, Politics and the Parlement of Paris under Louis XV, 1754-1774、日本十八世紀学会年報 12 号、1997 年

⑥（書評）森征一・岩谷十郎編『法と正義のイコノロジー』慶應義塾大学出版会、法制史研究 48 号、1999 年

⑦（書評）松本英実「一六世紀フランスの商事裁判所設立王令の登録について」、法制史研究 51 号、2002 年

⑧（書評）二宮宏之『フランス　アンシアン・レジーム論――社会的結合・権力秩序・叛乱』岩波書店、法制史研究 58 号、2009 年

⑨（書評）水林彪「近代憲法の本源的性格」（『企業・市場・市民社会の基礎法学的考察』日本評論社所収）、法制史研究 60 号、2011 年

⑩（書評）金山直樹『法典という近代』勁草書房、法制史研究 62 号、2013 年
⑪（書評）岩谷十郎・片山直也・北居功編『法典とは何か』慶應義塾大学出版会、法制史研究 65 号、2016 年
⑫（書評）小島慎司「制度と公開・均衡（一）～（四・完）―モーリス・オーリウによる大統領選出方法改革の提唱をめぐって」、法制史研究 69 号、2020 年

（4） その他

① 討論「ルソーにおける言語論と政治思想」をめぐって、姫路法学 20 号、1996 年
② 質疑応答「《シンポジウム》司法への民衆参加の歴史」法制史研究 45 号、1996 年
③ 基礎法ガイダンス「法制史」、別冊法学セミナー 法学入門 148 号、1997 年
④ 討論「近代法の歴史的布置」、金山直樹編『法における歴史と解釈』法政大学出版局、2003 年
⑤ フランス民法典 200 年に寄せて、創文 464 号、2004 年
⑥ 利用者から見た図書館「気分はベー・エヌ」、館燈 158 号、2006 年
⑦ 巻末エッセイ「六法」の源流を求めて、LAW BOOKS 法律書新刊在庫案内 33 号、2015 年
⑧ 巻末エッセイ パリの「法制史」通り、LAW BOOKS 法律書新刊在庫案内 35 号、2015 年
⑨ 巻末エッセイ パリの「法制史」通り bis、LAW BOOKS 法律書新刊在庫案内 40 号、2016 年
⑩ 巻末エッセイ ブリューゲル「バベルの塔」の周辺、LAW BOOKS 法律書新刊在庫案内 54 号、2017 年
⑪ 巻末エッセイ フランス民法典の名称の推移、LAW BOOKS 法律書新刊在庫案内 67 号、2019 年